Keyword　ひきこもり　国際比較　中動態　オープンダイアローグ

逃走からの逃走
現代フランス哲学の観点から見た
ひきこもりの理解と支援

国際文化研究科 国際文化専攻
国際文化研究分野 博士前期課程
2025年3月修了

賈 茹

主査 藤田 尚志　**副査** 松原 岳行　三國 牧子

研究背景

新型コロナウイルスの世界的な流行を経て、「ひきこもり」の問題はより深刻化した。山根（2021）は、現在強いられている生活がいつまで続くか分からないという先の見えない不安とストレスの連続で、「ひきこもり者」が増えるのではないかと警鐘を鳴らしていたが、その懸念はコロナ禍が収束しつつある今もなお、いやむしろ現在さらに現実性を帯びている。パンデミック後の日本社会において人々がさらに孤立し、支援の必要性がますます高まっているだけでなく、日本に特徴的な社会的課題として注目されてきた「ひきこもり」という現象自体が、近年では、そしてコロナ禍以降加速度的に、世界のさまざまな国でも深刻な社会問題として認識されるようになってきているからだ。

研究目的

①グローバルな問題として再考するには、「ひきこもり」を単なる心理的問題としてではなく、社会的・文化的背景をもつ複合的な現象と捉え、文化論的な国際比較を行なう必要がある。だが、そのような比較文化論はえてして表層的なものに終わりやすい。②現象の本質にさらに迫るには、哲学、とりわけ現代フランス哲学の観点が有効である。従来「非人間的なもの」（リオタール）を称揚するとされてきた現代フランス哲学だが、近年ではむしろ「壊れものとしての人間」（大江健三郎／村上靖彦）を繊細に見つめる眼差しとして再評価されつつあるからだ。本論文は、「ひきこもり」現象を比較文化論と現代フランス哲学の観点から分析し、より効果的な支援の可能性を探求することを目的とする。

研究概要

第一部では、「ひきこもり」の概念の歴史的変遷を辿り、日本、フランス、中国、韓国の事例を比較することで、各国におけるひきこもりの共通点と相違点を明らかにした。例えば、日本では「甘え文化」に端を発する母子癒着の傾向が見られる一方、フランスでは個人主義的な背景を遠因とする性暴力やドラッグとの関連が見られる。東アジアには総じて儒教的な家族主義の残滓が見られるが、中国においては宗族主義の形骸化と集団主義の結合が見られる一方、韓国においては少子化・受験戦争の激化の影響が前景化している。

第二部では、斎藤環によって推進された「ひきこもり」への精神分析的アプローチを継承しつつ、現代フランス哲学の概念を用いて、現象の本質にさらに迫ることを試みた。まず、クラインの「妄想分裂態勢／抑うつ態勢」に想を得た加藤隆弘（2020）の「健康なひきこもり／病的ひきこもり」の区別を、「死の欲動」に関するラカンとドゥルーズの再解釈（文化的・歴史的・象徴的次元において自己破壊にも治癒にも向かいうる根源的反復衝動として理解すること）によって基礎づけた。だが、そこで作動している転移（本論文では「転移2.0」と呼称）は未だ能動／受動関係の枠内で捉えられている。そこで、國分功一郎（2017）の「中動態」概念によって「主体性」の捉え方そのものを再考し、臨床心理学分野で注目されつつある「オープンダイアローグ」（当事者と家族・支援者の対話から能動／受動の枠に縛られない新たな道が切り開かれる）のひきこもり支援への適用可能性を模索することで、医者・支援者と当事者の新たな関係性（本論文では「転移3.0」と呼称）を構築する手がかりを探った。ドゥルーズ=ガタリ（1972）の「創造的／自己破壊的な逃走」の区別を含むこれらの理論的探究を通じて、ひきこもりが単なる社会的撤退（逃走）ではなく、人間存在や社会構造の根源的次元を照らし出す現象（逃走からの逃走）として捉え直される可能性が示唆された。

成果・まとめ

本研究を通じて、「ひきこもり」を新たな価値観や生き方を模索する可能性を秘めた現象として再評価する理論的基盤を提示しえただけでなく、柔軟な支援を可能にする具体策（オープンダイアローグ）の新たな理論的枠組み「転移3.0」をも提示することができた。むろんこのアプローチには、家族や支援者に長期的な支援態勢や高度なコミュニケーションスキルが求められるなど解決すべき問題も多い。だが、そこで提示された視点自体は、否定的・消極的に捉えられがちな他の現代的現象（アディクションや自傷行為）の理解にも寄与し、最終的には社会的偏見の解消、当事者の孤立感からの解放、支援者と当事者の対話を経た相互共鳴、社会との新たな関係性の構築につながるものと信ずる。

Point

指導教員コメント

従来の「ひきこもり」研究には基礎理論的な研究基盤とそれに基づいた包括的な支援策が不足していると感じ、留学生の視点からそれを国際的な文化比較といういわば水平方向の拡張と、現代フランス哲学の観点からの考察といういわば垂直方向の拡張によって、その欠如を補おうとしたきわめて野心的な研究である。論旨、論の運び、文章力など、改善すべき点はまだまだあるが、「ひきこもり」関連の文献のみならず、広く精神分析や現代フランス哲学の文献を渉猟し、「ひきこもり」以外にも応用しうる独自の整合的な解釈を創り上げようとしたその姿勢は、最大限の評価に値する。

藤田 尚志